その頃誰もがバカだった

ハスキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その頃誰もがバカだった

【Ｎコード】
Ｎ６４１９Ｔ

【作者名】
ハスキー

【あらすじ】
緊張することもなく、受験のストレスを感じることもない、中学生生活で一番バカをやれる中二。そんな中二の代表みたいな友人にツッコミ続ける日々を送る柳谷統夜。彼らに呆れつつも、楽しいと思う統夜もバカの一人。だってその頃は、誰もがバカだったのだから。

第1話・中二（前書き）

こんな中学生いないだろ、と思うかもしれませんが、暖かい目で読んでいただければ幸いです。そして笑っていただければなお嬉しい限りです。

第1話・中二

世の中には中（厨）二病という言葉がある。主に痛い方々に使われるらしい。よく知らないが要は中二が一番ぶっ飛んでてバカってことだろう。まあその評価を俺は否定しない。少なくとも俺の周りではそれは限りなく事実だからだ。

「大艦巨砲主義！　大は小をかねる！　やっぱ巨乳が一番だろ！」

「柏原、君はやはり時代遅れだな。世はちっぱいブームだ。胸は無ければ無いほどいい」

「んなもんオタクだけだろ！　今も昔も変わらない魅力が巨乳にはあるんだよ！」

　俺の目の前でアホな議論で火花を散らしているのは、残念ながら幼なじみである。

　巨砲主義のいかにもスケベそうなのが柏原湧（かしはらいさむ）。中二と言えばこんなのというのを地でいくバカである。

で、まな板に豆主義なのが原田政明（はらだまさあき）。アニメに関する英才教育を受け、オタクを地でいくバカである。

　そして俺が柳谷統夜。暴走する友人達にツッコミを入れる苦労人。

「では柳谷氏。君はどう思う？」

「そうだ、さっきからだんまりはずるいぞ！」

　何がずるいか全然分からん。でもこんな議論に真面目に参戦する気も毛頭ない。てか…。

「オープニングから何とんでもねぇ議論繰り広げてんだお前らはっ！」

　いきなり下ネタから入ったらもうネタ無いのかと思われるだろ！

「仕方ねぇだろ。中二なんて下ネタくらいしか考えることねぇんだから」

　もっと他に考えることあるだろ。自分の中二観だけで語るんじゃ

ない。
「下ネタとは心外だな。僕が語っているのは現代における女体の神秘の追求…、いわば芸術なのだ！」
盗撮見つかった時の言い訳にしか聞こえない。お前のフェチイズム何か芸術評価してもらえるか！
「下ネタにしろ神秘の追求にしろ、他に話すことねぇのか？　勉強のこととか」
勉強というワードに柏原は明らかに難色を示した。こいつは滅茶苦茶勉強が嫌いなのだ。
「俺は分数で数学を諦め、そしてｂｅ動詞で英語を諦めた男だぜ？　勉強で語ることなどない！」
分数は算数の範囲です。
「同感だな。そんなことに脳の容量を使うなら、一つでも多くのゲーム、アニメを網膜に焼き付ける！」
ダメだこいつら。進路先は確実にバラバラだろうな。別に俺が頭いいと言ってる訳ではないが、ここまで勉学を軽んじていない。
「まあ中三から頑張ればいいんだよ。高校が見んのはそっからの成績なんだからよ」
悪いが中三から勉強頑張る柏原を全く想像出来ない。
「よっぽど優秀な家庭教師とワンツーマンくらいしなきゃ無理そうだな」
「え、美人家庭教師とワンツーマン！？」
誰も美人なんて言ってない。
「やべぇな、勉強どころじゃ無くなるぞおい！」
柏原の頭の中では既に美人家庭教師が来ることになってるらしい。
「心配する必要はない。既にそのパターンは経験済みだ」
「マジか！？」
「ゲームで」
「やっぱりかよ！」
勉強が脳の容量の無駄とか言ってる奴に、家庭教師なんてもった

いなくて雇ってられんわな。
「貸してやろうか？」
「…お願いします」
「借りるんかい！」
思わず声出してツッコんじゃったよ！
「ち、違うからね。別にエロいの期待してるわけじゃないからね」
よしエロいの期待してるんだな。心配しなくても、お前はそういう奴だって思ってるよ。
つかまだ中二なのにエロいゲームが手に入るわけが…。
「ネットショッピングで年齢偽って手に入れた。柏原氏の期待に応えられるだろう」
「応えちゃダメだろ！」
宅配の兄ちゃんも年齢確認しようぜ！　酒とかタバコは厳しく年齢確認するくせに！
まあ宅配の兄ちゃんが酒タバコの確認してるわけじゃないけど。
「つか柏原の姉ちゃんって大学生だろ？　家庭教師してもらえばいいじゃん」
第一話で実はもへったくれもないが、柏原には姉貴がいる。確かそこそこの大学に入ったはずだ。
「お、恐ろしいこと考えるんじゃねぇ！　姉貴に勉強教えてもらったら、条件に何を言い出すか分かったもんじゃない！」
俺や原田の前では普通の優しいお姉さんなのだが、弟の前では違うらしい。
「だからこそ、ゲームで夢を見ればいいんだ。美人家庭教師とのシチュエーションは誰もが憧れる」
いや、憧れた覚えがない。
「実際に家庭教師頼んだって男が来るか中途半端な女が来るに決まってる！」
失礼なこと言うな！
「ならゲームの中でくらい、好みの美人家庭教師で教えを請いたい

じゃないか」
二次元至上主義のお前なら大満足だろうが、三次元至上主義の柏原は微妙だろう。
「そうだな…。姉貴に頼むくらいなら、せめてゲームで夢見るか」
あっさり陥落してる！？
「落ち着けぇっ！　そもそも家庭教師なんか例え話なんだから、他に勉強法を考えりゃいいんだ！」
「「あれ、勉強する話だっけ？」」
どうして二人共疑問符付けて返してくるかな！？
「俺は家庭教師でも付けなきゃお前は勉強しないだろって意味で言ったんだ。なのに美人家庭教師がどうのと勝手に妄想宣いやがって…」
と、愚痴っているのに関わらず、柏原はポカンとしていた。
「…宣うってなに？」
俺は言葉を失った。ああ、中二だし普通分からないよな。
「辞書引け」
「持ってない」
だからお前はアホなのだっ！
「とにかくもう帰ろう。夕方六時代のアニメが始まってしまう」
君の世界の中心はアニメか！
そうだ！…と即答しそうで怖い。
「ちっ、中学生にもなって六時に家に帰りやがって…。付き合い悪いぞ」
帰宅部の俺らにとっちゃ妥当だろ。つか放課後から二時間以上話してた計算になるから、充分付き合いはいい方だと言える。
つかそんなに中学生らしいことしたいなら…。
「じゃあ校舎の裏で煙草でもふかすか？」
「見つかれば逃げ場もない～。って尾〇豊か！」
来年なら丁度良かったんだけどな。
「俺はそんな前時代的な中坊になりたかねぇんだよ！」

いや、下ネタに走る当り充分前時代的な中坊だよ？
「では中坊のニュータイプたる僕は忙しい。失敬する」
そう言い残して原田は帰っていった。タバコにハマるよりアニメの方が健全かもしれないが…。
「何がニュータイプだ。仕方ねぇ。エロ本落ちてないか探しながら帰るか」
落ちてるエロ本探すってタバコ以上に前時代過ぎるだろ。
とかく俺と柏原は帰路に着いた。
思考の極端な奴二人に挟まれ、気苦労の多い毎日を送っているが、案外嫌いじゃない。
それはやっぱり、俺自身もバカだからだろう。

第２話・両親

どうも統夜です。落ちてるエロ本を発見出来ず意気消沈の柏原を元気付け現在１９時…。普段１８時半には帰宅してる俺にとっちゃちょっと遅い帰還だ。まあ俺の親に限って小言聞かされることは…。
「統夜！　何時だと思ってるの！」
あった。珍しく母さんが玄関で仁王立ちしている。
何回か１９時回った時があったがキツく言われたことなかったのに、今日に限ってどうしたもんか。
「ただいま。現在の時刻は１９時３分だ」
「あらそう。ご飯もうすぐ炊けるわね」
怒ってたのにご飯の心配？　十年以上この人と親子やってるが、未だに精神構造が分からん。
「とにかく荷物置きに行っていい？」
「どうぞどうぞ…って待ちなさい！」
小言言ってたこと思い出したのだろうか。
「一回遅くに帰ってきた息子を叱ってみたかったの。ありがとう」
実の母親が親指立てて極上スマイルを見せてくれた。さて、１９時は「遅い時刻」に含まれるのか。息子を叱ってみたかったってどんな神経してんだ。等々ツッコミどころがあるが、無視して部屋へ上がった。
かばんを部屋へ投げ出しリビングへ足を運ぶ。
全く、家に帰ってまでツッコミ役したかないっての。
「ただいま～。我が家の大黒柱のお帰りだぞ～」
父さんが帰ってきたか。今日はやけに早いな。
「おう、我が息子よ。帰ってたか。だが中二になったことだし、道草してタバコふかすぐらいしろ」
「あんな百害あって一利もないもん、吸う奴の気がしれないね」
自分の息子に何喫煙推奨してんだ。似た者夫婦って言うか…、と

かく両親共にボケだから俺の休まる暇がない。
「百害あって一利無し…か。諺なんか使いやがって、品行方正にも程があるぞ！」
品行方正の何が問題だと言うのだろうか。確かに柏原と比べると真面目な方なんだろうけど。
「でもあなた、統夜ったら今日19時過ぎに帰ってきたのよ」
「なにぃっ！」
母さんめ、余計なことを…。
「その調子だ。たまには親らしいことするために、どんどんやれ」
何故に両親共に息子の非行を喜ぶのかね。まあちょっと帰るの遅くなった程度だけど。
「ようし今日は統夜の門限突破祝いだ。母さん、大盤振る舞いにしてくれ」
「じゃあベーコン焼こうかしら」
ショボっ！　おかず一品増えただけじゃん！　つかうちに門限なんて無いだろ。あと門限突破祝いってなんだ!?
「ベーコンか。塩コショウ振りまくったら酒の当てになるかね？」
未成年の俺に聞くな。
「知らないけど、塩分取りすぎで生活習慣病へ大きく前進しそう」
父さんは自分の腹部を見て台所へと消えた。

「鯖の塩焼きか…」
「ええ」
「塩分控え目でな」
「あら？　いつも塩辛くないと酒の当てにならねぇって言ってなかった？」
「…いや、最近味覚変わってな。薄味でも呑めるようになった」
「そう、分かったわ」
あ、戻ってきた。そして自分の腹部を見つめ、明らかに落胆し座

った。

「若い頃は無茶しても平気だったのになぁ…」

どうやら中年には中年なりに悩みがあるらしい。話の流れからして、塩分過多を注意されたんだろう。

「つかどうして塩分ねぇと酒が進まねぇんだ？　別にケーキとビールでも…。いや、これは無いわ」

居酒屋でケーキを当てにビール飲んでるリーマン居たらシュール過ぎる。

「鯖焼けたから、配膳手伝って～」

「よっしゃ行ってこい統夜！」

「へいへい」

俺は腰を上げて台所へと赴く。魚の焼けた良い匂いが俺の鼻腔をくすぐった。

「ご飯もよそって持ってくよ」

「ありがとう。本当に私たちの子供か疑いたくなるくらい、出来た子ね」

「そこは自信持ってよ」

反面教師の賜物だから…とは言わぬが花ってね。

お盆に乗せテーブルへと運び配膳していく。家族三人分並んだところで、父さんが音頭を取る。

「んじゃいただきます」

「「いただきます」」

やっぱ魚と白米は合うな…。

父さんは大人しく鯖をつついている。だが震えているような…。

「ええい！　生活習慣病がなんだ！　俺は太く短く生きるんだぁっ！」

父さんはそう叫んで冷蔵庫へダッシュした。

そして手にしたのは缶ビールと塩コショウの瓶。もはやアルコール中毒じゃん。肝臓に癌が出来そうで心配だな。

「統夜、塩分取りすぎたらどうなるの？」

「血圧上がる」
「うっ！」
父さんの塩コショウを持った手が止まる。
「まあ、血圧上がったらどうなるのかしら」
「動脈硬化して、そうなった場所によって色んな病気が起こるね」
「ううっ！」
ああ、悩みが無限ループに入ってるみたいだな。
「さらにお酒何か飲んだら大変じゃない？」
「動脈硬化に関係してるか知らないけど…」
あ、塩コショウ置いて缶ビールに手を伸ばしやがった。
「発癌率は跳ね上がるね。父さんタバコも吸うし」
「チクショォォォォォっ！！！」
父さんは雄叫びを上げ缶ビールを握り潰した。
って何やってんだこの人！？
「母さんタオルタオル！」
母さんは直ぐにタオルを用意し、こぼれたビールを拭き取りにかかった。
カッターシャツのまま父さんは食事をしていたので、右裾はびしょびしょ。脱衣場に直行した。
「ちょっと追い詰め過ぎたかしらねぇ…」
母さんは申し訳なさそうに脱衣場を見る。
父さんは日本人にしては酒強い方だ。その代わり内臓脂肪付きやすい傾向にある。まあ結果オーライかな。
ビールを拭く母さんを手伝いながらそう思った。

第3話・姉貴

よう、柏原湧だ。残念ながらエロ本は見つけられなかったがまあいい。家にある奴で我慢するか。とある事情で家には俺しかいないはずだしな。

「ただいま〜っと」

ま、誰かいるわけないけどな。父さんは国際ジャーナリストで海外飛び回ってて、母さんは父さんについていっている。

つまり俺と姉貴の二人暮らしってわけだけど、その姉貴も今はバイト。俺の天下だぜ。

「お帰り、遅かったわね」

俺の天下一瞬にして崩落。つか何で、どうして、ｗｈｙ!?

「どうして姉貴がここに!?」

「ん〜?　何かバイト無くなっちゃってさ。店長がミスってシフト入れ過ぎちゃったみたい」

みたい…じゃねぇよ!

これじゃおちおちお宝本観賞も出来ないじゃないかよ…。

「全く、世界でただ一人血を分けた姉弟だってのに、そんなに絶望することないでしょうよ?」

ちっ、まあ姉貴がバイト入る日なんていくらでもあるだろ。お宝観賞会は次に取っとくぜ。

「ああ、そうそう」

「ん?」

「あんたのお宝本、すぐ見つかりそうだから場所変えてあげたから」

………?

えっとお宝本の隠し場所が見つかって、姉貴は親切に場所変えてくれたのか。

「そっか、ありがとな」
「なんのなんの」

って…。

「アホかぁぁぁっ！！！」
何処の世界に弟のお宝本の隠し場所変える姉貴がいるんだよ！
とにかく確認せねば！
俺は階段を駆け上がり、二階の自分の部屋に飛び込んだ。
そして隠し場所を確認する。
「そんな…。マジで無いじゃん…」
俺は膝を落とし落胆した。雨の日、薄暗い中輝いて見えた一冊の本。まさに“お宝”と呼ぶに相応しい光を放っていた。そんなお宝本を集めウンヶ月。まさかもうお別れの時が来ようとは。

…いや、まだだ。
まだお別れには早すぎる。諦めたらそこで観賞会終了。先生…。
俺、まだ観賞したいです！
「あぁぁぁねぇぇぇきぃぃぃっ！！！」
俺は一気に階段を下り、姉貴に詰め寄った。
「俺のお宝本はどこだぁぁぁっ！！！」
「お宝は自分の力で掴み取ってこそでしょっ！！　自分で何とかしなさい！！」
そうか！　確かに自分で見つけ出したお宝本だからこそ愛着が生まれたと言っても過言じゃねぇ。
よっしゃ絶対見つけ出してやるぜ！
「そんなことよりご飯にしない？」
俺は姉貴の気の抜けるような台詞に躓き、そしてテーブルの脚に足の小指をぶつけた。
「ぎゃあああっ！！！」

急所の次に痛い身体の部位だよここ！
「一人で何悶えてるの？　妄想でも大丈夫な口？」
「ぐぅ…。お、弟を勝手にそんなマニアックな道を走らせてんじゃねぇ…」
しかもそんなゴミ見るような目で。
「いやぁ、お宝本無い頃は妄想でも大丈夫だったんじゃないかと」
んなわけあるかぁっ！
少なくとも俺は視覚が満たされねぇとダメなんだよ！
「まあ腹が減っては戦は出来ぬ。お宝本探しはそれからでいいでしょ。パパっとパスタ作っちゃうから待ってて」
そう言うと姉貴は台所に行った。勝手にお宝本の場所変えて、勝手に飯にしようとしやがる。本当に勘弁してほしいぜ…。
けど飯作る間に探すことは出来る。さっそく捜索といくか。
取り敢えず自分の部屋だな。俺はまた二階に上がった。
自分の部屋を冷静に見渡すと散らかっているのがよく分かる。場所を知ってる俺はともかく、何故姉貴はこんなごみ溜めからお宝本だけを見つけ出せたんだ…？
姉貴の奴、最初っからお宝本狙ってやがったな。
何にせよ、部屋片付けないことには捜索どころじゃねぇな。掃除するか。案外その最中に見つかるかもしんないし。部屋が綺麗になってお宝本見つかりゃ、まさしく一石二鳥だぜ。

こうして俺は掃除を始めることにした。
脱ぎ散らかした服はまとめて洗濯機だな。いつ着たかも分からねぇのばっかだし。
いらねぇプリントも全部捨てちまえ。中一の頃のテスト？　もちろんいらねぇプリントの一つだ。まあ奇跡的に五十点超えた理科のテストと保健体育のテストは残しておくか。もう二度と五十点なんて超えねぇだろうしな。
あ！　昔のジャ◯プじゃねぇか。三ヶ月に一回のペースで大体

廃品回収行きだが、残ってた奴があったのか。
へぇ～…。
まあいい。ひとまず飯食って今後の掃除&お宝本捜索に備えるか。
一石二鳥の計画が…。
しまったぁっ！　思わずジャ〇プ読み耽っちまった！　俺の
「あいよ～。って…」
「ご飯出来たよ～」
下に降りると待っていたのはミートスパゲティだった。シンプル
なだけに食べ安いから、早く食い終わる。
「んじゃいただきます！」
フォークでパスタを巻き、口へ運んでいく。
「あ、間違えて唐辛子の粉末入れちゃったけど大丈夫だよね？」
もちろん俺の手は止まった。舌の痛覚が刺激され、汗が流れる。
「ぎゃあああっ！！！」
大丈夫なわけあるかっ！
水を一気に飲み干し姉貴を睨む。
「何しやがんだ！」
「ドジっ娘萌え？」
もう二十歳のくせに何がドジっ“娘”だ！　なんて言ったらど
うなるか分かったもんじゃないから、思うだけで止めておく。
「んなもん現実にやられても迷惑なだけだろうが」
「そっかぁ。萌えなかったか」
んなとこ問題にしてねぇよ！　つか何残念そうにしてんだよ！
姉貴に萌える弟が現実にいるわけねぇだろ！
「まあ頑張って食べてね。私も頑張るから」
フォークでパスタを巻き、姉貴は口へと運んだ。
「かっっっらっ！！！　なにこれ、何スコビルあるの？」

戻った。

「知るか！」
ちなみにスコビルってのは辛さの単位のことな。
火を吹きながらも何とかスパゲティを完食し、俺はお宝本捜索に

…が、全く見つからねぇ。まさか俺の部屋じゃねぇのか！？
「ようやく気付いたみたいね」
「姉貴…」
「そう、実は私の部屋にあるのよ！」
それを聞いた瞬間、俺は枕を姉貴に投げつけた。顔面にまともにくらい、固まっている姉貴を尻目に、俺は姉貴の部屋に突入した。
俺のお宝本は机に置かれていた。
「こっちの方がマズイだろうがぁぁぁっ！！！」

第４話・委員長

ある日の午後からの授業。担任である尾崎先生がダルそうに入ってきた。
「はい席つけお前ら。今日のＨＲは来週の山登りの班決めだ。方法は委員長に任せる」
そう言うと先生は一番後ろの空席に腰を下ろした。やる気の無さは天下一品だな。
そんな先生に代わって教壇に立ったのは伊藤綾（いとうあや）。才色兼備の優等生で我が二年一組の委員長だ。
「これから先生が仰っていたように、班決めをします。適当に五人集まってもらえば結構です。が、手元の資料には何故か男女混合と書いてます。早めの少子化対策でしょうか？」
いくら何でもそれは深読みし過ぎだろ。
「という訳で少し時間を取りますので、各自班を作って下さい」
委員長の言葉で皆は班を作り始める。
俺の周りは一言も声をかけていないバカ二人しか来なかった。
「ち、何かモテねぇヤツとモテるヤツ分けられたみたいでムナクソ悪いぜ」
柏原はこう呟くが、実際はこいつの普段からの下ネタ発言に、ほとんどの女子が引いてる結果である。あと原田のマニアックさにも。
俺にしてみればとばっちりだ。
「予想通りこの三人が溢れてるみたいですね」
「みたいね」
そう言ってこちらにやってきた変わり者は委員長と、その友達奥井紗香（おくいさやか）だ。
「一緒の班になってくれるのか！？」
柏原はさっそく二人の女子に飛びつく。さっきまで不機嫌は何処へやら…。

「委員長としては仲間外れを作るわけにはいきませんから」
「私はその付き添い」
よく見れば俺達以外は上手いこと班が決められている。
なるほど、委員長は溢れる俺達の救済策か。理解すると滅茶苦茶惨めな気分になるな。
「よく分からねぇけど、よろしく頼むぜ」
こういう時柏原のバカさが羨ましい。ただ女子と同じ班になれるってだけで、舞い上がれるのだから。
こうして山登りの班は俺、柏原、原田、委員長、奥井となった。
柏原と原田のバカ話に二人が呆れないことを祈ろう。

ＨＲが終わり、休み時間となる。意気揚々と隣に柏原が腰掛けてきた。
「いやぁ、俄然楽しみになってきたなぁ、山登り」
何がそんなに楽しいものか。年寄りの行楽じゃあるまいし、テンション上がらないっての。
俺と同じく意気消沈気味の原田もこちらにやってきた。
「全く理解に苦しむね、柏原氏。大艦巨砲主義の君が、ツルペタ三次元女子と群れることを楽しむなんて」
あれ、気掛かりなのはそっちですか？
「そりゃ巨乳の方がいいけどよ。さすがに中学生で巨乳はバランス悪いだろ。やっぱＪＣにはＪＣの良いところがあるってこった」
こっちはこっちで変な講釈垂れだした！
巨乳でも中学生でもいいって、もはや何でもアリだろ！
「そうですか。巨乳のＪＣはバランス悪いですか。嫌われましたね、紗香」
「いや、私別に巨乳じゃないけど」
意外にも柏原と原田のバカ話に首を突っ込んできたのは、委員長と奥井だった。
「う～む…」

さっきの委員長と言葉が気になったのか、柏原の視線は奥井のある一点に集中していた。
「ってどこみてんの！」
奥井の水平チョップが柏原の首に入った！？
まあ柏原（ケダモノ）に凝視されたら水平チョップの一つや二つ入れたくなるわな。
「どうでした、柏原君？」
「服の上からじゃやっぱ分からねぇわ…」
息も絶え絶えながらも、委員長の質問に律儀に応える柏原。
「じゃあプール開きをご期待下さいってところですね」
「だな…」
あの委員長が柏原と同レベルの会話をしているだと…。
「どうかしましたか？」
委員長は真っ直ぐな目で俺を見据える。
「いや、委員長がそんなこと言うなんて思ってなかったから」
たじろぎながらもそう言うと、委員長は小さく笑った。
「保健体育の成績も良いんですよ」
「さっきの会話、全く保健体育の知識入ってなかったでしょ」
ツッコミ取られた！？
なるほど、しっかりものの優等生かと思いきや、委員長ボケだな。
そして奥井がツッコミか。社会的役職とお笑いポジションが一致してねぇ！
「ごめんね、柳谷君。幻滅させちゃった？」
「幻滅するほど仲が良かったわけじゃない。驚いたのは事実だけど」
伊藤は率先して委員長に立候補したし、奥井も彼女の仕事をよく手伝っている。まだ同じクラスになって一ヶ月しか経ってないが、少し先入観を持って彼女らを見ていたのは事実だ。
「せっかく同じ班なのですから、親睦を深めようと思いまして」
そんな切り口では柏原と以外親睦を深められないぞ。
「…まあ少しはどういう奴かは知れたかな」

肩をすくめて俺はそう言った。委員長には奥井っていうツッコミがいるわけだし、俺の負担が増えることはないだろう。
「胸の話で盛り上がっていましたから、イケると思ったんですが」
いつかの会話（第一話）聞かれてた！？
あの時の暴挙がこんなところに皺寄せが来るとは…。柏原と原田ぶん殴りたくなるな。
委員長と奥井とのマトモなコンタクトを逃したと思うと、やるせないな…。
「でも普段から下ネタ多いよね」
「いえ、保健体育の復習です」
普段からかよ！　どのみちこうなることは避けられない訳ね。
「委員長…。俺、あんたとは仲良く出来そうだ」
「そうですね。貴方とは同じ匂いを感じます」
クラスと頂点と底辺ががっちり握手を交わした。
ある意味奇跡的なシーンに感動すら覚えてしまう。
俺は頭を抱えた。
「知らなかったとはいえ、よく委員長をやっていられるもんだ」
「綾って公私混同しないから。その代わり、反動のせいか普段はえげつないけどね」
つまり今は“私”ってか。まだ学校何だから“公”でいてほしいね。
あれ、でも少子化対策がどうこう言ってたような…。
よし、中学生だし、よく分からないってことにしよう。
おお、原田ですら同様してる。
「バ、バカな…」
「この僕が空気だと！？」
知らねぇよ！
だったら会話に入ってこい！
「大丈夫、綾はアニメとかにも精通してるわ」
「そうか。なら出番はあるな」

既にこの会話が大丈夫じゃない。出番とか言うんじゃねぇ。
「では私たちはこれで。楽しい山登りと致しましょう」
委員長は時計を一瞥するとそう告げた。もう直ぐ六時間目が始まる時間だ。
「じゃあね」
「おう！」
奥井が手を振り、柏原が応える。別に下校ってわけじゃないんだが。
二人は席に戻ると次の授業の準備を始めた。
切り替えの速さには驚かせられるな。
「何だか楽しくなりそうじゃねぇか。プール開き」
「お前は結局胸にしか興味ないのか！」
とツッコミと同時にチャイムが鳴った。
委員長と奥井のためにも、柏原だけは外した方がいいかもしれない…。

第5話・父と原田とお宝本（前書き）

今回は三本立てです。

第5話・父と原田とお宝本

よう、俺は統夜の父親だ。せっかくの日曜だし、久々に息子と戯れるか。

そう思い俺はリビングの引き戸を男らしく開けた。

きっと統夜が「朝っぱらからうるさいよ！」というツッコミというをしてくれるはず。あいつのツッコミを聞かねぇと一日が始まらねぇからな。

………八十年代のマンガだったら背景にトンボが飛んでるぜ。

んなことよりいつまで経ってもツッコミがこねぇじゃねぇか。まさか反抗期か！？

く、あまりにも楽しそうに俺達がボケるから、ツッコミなんざやってられっか自棄を起こしやがったな…。

チクショウ、確かにボケは楽しいけどよ。じゃあ俺の朝はどうなるんだよ！

仕方ねぇ。ここは母さんにでも緩くツッコんでもらうか。

けど母さんのツッコミは緩すぎて、イマイチボケだかツッコミだか分からねぇからな。

たまにこっちが萎縮すんだよな。

さあ、母さんなりにツッコんでこい！

………今度はカラスが飛んでるかな。もちろん八十年代のマンガなら。

つか静かだなぁ。思わず縁側でお茶啜りたくなるぐれえ静かだ。

なるほど、つまり…。

家に誰もいねぇって訳だな！
チクショウ！
一家の大黒柱置いてどっか行ってんじゃねぇよ！
と、家族の冷たさを嘆いていると、がちゃっとドアが開く音がした。
「ただいま〜」
この声は母さんか。誰でもいい、ツッコんでもらって俺は朝を迎えるんだ！
「おかえり！　早くツッコんで俺に朝を迎えさせてくれ！」
母さんが買い物袋を下ろし、「何言ってんのこの人？」みたいな顔して俺を見る。
「どうして一瞬この人と一緒になったんだろうと考えてしまったけれど…」
中々キツいこと言うな。だがツッコミをもらうまで俺は引くわけにはいかねぇ！
「もう昼ですよ」

……………え？

なんということだ。ああ、失敬。僕は原田。誇り高きオタクだ。
何がなんということだなのかと言うと、見たいアニメの時間帯が被ってしまったのだ。二つならまだ良かったんだが、なんと三つも被った。
全く時間帯をずらしてくれればいいものを…。下らない深夜バラエティー番組を放送するくらいなら深夜アニメにしろ！
まあ、あまり多く放送されると捌ききれなくなるんだが。

それに僕ほどのオタクになると、放映中のアニメを全てチェックして神かクソか決める。数が多いと体力的にもたなくなるのだ。あとギャルゲーする時間も減るし。

それより今の問題は三つも重なりやがったアニメだ。

前情報でクソ臭がする方を切るというのもあるが、それは僕のポリシーに反する。

あとでインターネットを見るというのも、犯罪行為なのでやはり僕のポリシーに反する。見逃したらＤＶＤ買え！　そして業界に金をばら蒔け！

おっと僕としたことが無駄に熱くなってしまった。

こうなっては仕方ない。文明の利器を利用し、さらに人脈を活用しよう。

秘技！　友達に頼んで録画してもらう！

という訳で早速電話だ。

柏原が妥当だな。

ツーコールで柏原は電話に出てくれた。

「もしもし？」

「ああ、すまないな。今大丈夫か？」

「大丈夫だぜ。どうしたよ？」

「用件は他でもない。被ったアニメの録画を頼みたいんだ」

そして僕は録画してもらいたいアニメを告げた。すると柏原は難色を示す声を上げた。

「悪い、この時間帯は姉貴が深夜ドラマ録っててさ。ちょっと無理っぽいわ」

く、やはり姉の方が権力は上か。あの姉を言いくるめることは出来そうにない。残念だが引き下がろう。

という訳で柏原との電話を切る。次はどうも非協力的だが…、やるしかあるまい。

僕は柳谷に電話をかけた。

「ざけんな」

出るのも早かったが切るのも早かった。説得する間もなかったなぁ。
友達なら番組の録画くらいしてくれてもいいのに。
じゃあ次は…。

ん…？

はは、誰もいないじゃないか。

く、仕方ない。どれか一つを犠牲にするしかないか…。好きなマンガの奴とアニ〇ージュで面白そうだった奴にしよう。

そして翌朝。
少し早起きしたことだし、一本見ていくか。
再生っと。
だが液晶画面に映ったのはジャニーズ顔のイケメン俳優やアイドル顔の女優だった。
設定ミスったか？
暫くしてタイトルが流れる。
好きなマンガの奴だった。どうやらアニメ化ではなくドラマ化だったらしい。
僕はソッコー消して、夢だったらいいなと思い二度寝した。

柏原だぜ。俺は今林道を舗装された道を外れた、獣道っぽいところを歩いている。同志のタレコミによると、お宝本の目撃情報がこの近辺で報告されたらしい。お宝本ハンターとして見過ごすわけにはいかねぇ。早速調査開始だぜ。

っていっても一昨日の雨がまだ残ってやがんのか、地面は微妙に湿ったままだ。こりゃブツを見つけても悲惨な状態かもな。

俺は興奮を抑えブツに近付く。そして意を決してブツを確かめた。

お、雑誌発見！

これはもしかするともしかするんじゃねぇか！？

「ちぇ…。マガ○ンかよ」

どうせならサ○デーかジャ○プ捨てとけよな。読むマンガほとんど無いんだよ…。

しかもグラビアページだけ無いだと！？

許されねぇな…。

グラビアページの無いマガ○ンなんて○ガジンじゃない！　こんなこと言ってんの俺くらいなもんだろうけど！

そんなことよりお宝本だ。お宝本の前ではマンガ雑誌など無価値に等しい。三大欲求の一つの前にひれ伏すがいいぜ！

「おっ…」

思わず声が漏れる。半裸の女性が表紙の雑誌を見つけたのだ。少年誌の清純な魅力ではなく、まさしく妖艶な魅力。ウヒヒ、同志以外には見せられん顔になってちまうぜ。

さて早速ブツを確かめに行くか。

中々妖艶な上バストが豊満なお姉さんだぜ…。しかし湿っててページが貼り付いてそうなのが残念だ。

ま、とりあえず捲れそうなページだけ捲ってみるかな。

俺は高鳴る胸の鼓動を抑えながらお宝本を手に取る。

するとムカデやら名称不明の不快虫がワラワラと出てきた。

「うぎゃあああああああ！！！！！」

思わずお宝本を投げ出し尻餅をつく。どうやら虫達の隠れ家になっていたらしい。ふと手を見ると、一匹の虫が這っていた。

「っ！？」

俺は手を思い切り振り回しその場から駆け出した。

教訓、雑木林に落ちてるお宝本は触っちゃダメ。

第6話・みっくすじゅーす

ども、柏原栞（しおり）です！　下ネタ大好きな柏原湧の姉って奴だね。

今日もまたバイトが早めに終わったので、弟に何か素敵なプレゼントをしたいと思います。つか何で私こんなに早くバイト上がらせられるんだろ…？　まあ細かいことは気にしない気にしない！　今は弟に素敵なプレゼントをすることに努めなければ！

でも良かれと思ったお宝本移動は逆効果だったし、何がいいのかしら。最近の中学生全く読めないわ…。お宝本追加とかなら簡単に喜んでくれそうだけど、それじゃ芸がないし。

そうだ、オリジナルのミックスジュースとか作ったらどうかしら。

そうと決まれば早速冷蔵庫に突撃ね。

私は冷蔵庫の中をガバッと開けてみた。むむ…、中々のスカスカ具合ね。買い物行った方がいいかしら。あ、久々に姉弟水入らずで買い物もいいかも。ミックスジュースプレゼントしてあげるんだから、買い物くらい手伝ってくれるわよね。

さて、材料として使えそうなのはと…。む、ニンジンとピーマンに牛乳かぁ。野菜がニンジンとピーマンしかないなんて、ミックスジュースとして致命的な気がするわね。他に何かないかな。

あ、そういやお母さんから補給物資が届いてはず。中身見るの面倒だから、段ボールのまま押し入れに入れちゃったのよね。

というわけで、私は押し入れから段ボールを取り出した。届いて三日くらい経ってるけど、生物が入ってるわけじゃないし大丈夫よね。

かぱっと、いや音的にビリっ！　とかベリっ！　って感じだけど、とにかく段ボールを開けた。

その瞬間、私の鼻腔にとてつもない臭気が届いた。

てか臭い！

超絶にキムチ臭い！

家の一帯が韓国みたいだよ…。
そうだ、これもミックスジュースの材料にしよう！　牛乳で匂いが消えて、案外いい感じになるかもしれないし！
ついでに韓国海苔と韓国海苔ｉｎチョコレートも入れよう。キムチの辛さが抑えられるし。前のスパゲティで辛さに抵抗があるかもしれないしね。
さっすが私、こんな弟想いなお姉ちゃんいるかしら。
早速レッツミックスジュース！

ちっ、最近原田も柳谷も付き合い悪いぜ。放課後の語らいよりもドラマの再放送選びやがって。
まあいいや、俺もドラマの再放送見よ。どうせ帰っても俺一人だし。
「つう訳でただいま〜」
「何がつう訳か分からないけどおかえり〜」
ってわおっ！！
何故にまたもや姉貴が居んの！？
「バ、バイトはどうしたんだよ？」
「何かまた早く上がっていいって言われてね」
どうしてこう何回も早く上がらせられるんだよ！　まさかハブにされてんじゃねぇか？
「まあ細かいことはいいじゃない」
「全然細かくねぇよ！」
親の仕送りあるから経済的には大丈夫だけど、姉貴のポケットマネーには大きく影響すんじゃねぇの！？
「それより早く来てよ」
「んだよ…」
またお宝本隠したりとか余計なことしたんじゃねぇだろうな。

姉貴は俺をダイニングへと通した。
「なっ…！」
俺の視線を釘付けにしたのは、ジョッキに注がれた変な液体だった。小学生の時に滅茶苦茶に色を混ぜて作った色に似ている。あと何かキムチ臭い。
「プレゼントフォーユー！」
「いらねぇ！」
どう見ても汚物じゃねぇか！
「見た目ちょっとアレなのはチョコレート入ってるからよ。きっと甘辛い素敵な味になってるわ」
「甘辛いってなんだよ！　醤油砂糖か！」
「いんや、チョコレートとキムチ」
「この匂いやっぱキムチか！！」
学校じゃボケ倒してるっていうのに、姉貴のおかげで家じゃツッコミっぱなしだぜ…。
「まあいいから飲んでみなさいって」
「嫌だ！　…ってそれを俺の口に近づけるんじゃねぇ！」
俺の言葉はバカ姉貴には届かず、どんどん汚物が俺の口に近づいてくる。
「さあグイッと」
「無理だっ！　ってごぼっ…」
姉貴の狂気を抑えきれず、ミックスジュースという名の汚物は俺の口に進入した。何かどろどろした物が喉を通過していく。ヘドロののど越しって多分こんなだなって思う。
味？　もう甘いやら辛いんやら訳分からん。
ただ一言言えるのは…。
「まっずっ！！！」
取り敢えず俺はトイレへと駆け込んだ。
「おえぇぇぇー」
吐けっ！　吐くんだ俺っ！　胃が毒素を吸収する前に出来う

る限り吐き出せ！
いくら姉貴でもマジ身体に悪いもんは入れてねぇだろうけど、食い合わせってもんがあるからな。
とにかく今は吐き出すことだけを考える！
と、姉貴がトイレの扉越しに話し掛けてきた。
「ねぇ、冷蔵庫空だから買い物付き合って」

で、俺が買い物付き合ったかって？

もちろんトイレに引き込もってボイコットしたさ。

第7話・山登り

柳谷統夜です。まさか二回飛ぶとは思わなかったが、いよいよ山登り当日だ。果たしてこんな視覚的にしか山とオチがない行事で一話持つのだろうか。
そんなメタ発言はさておき、バスに揺られること数時間。俺達は山の麓に到着した。担任、いや委員長の統率力のおかげで直ぐに班に分かれて登山が開始された。本当にうちの担任はダメだな。優秀な委員長がいるからダメになるのか、ダメな担任がいるから優秀な委員長になるのか…。まあどっちでもいいや。
クラス全員を送り出す都合上、俺達の班は最後に出発となった。ちなみに担任は先頭でさっさと行ってしまった。しんがりをさせたらどっか行ってしまいそうだし、適材適所と言える。
「さぁていよいよ登山だっ！　張り切って行こうぜ！」
こんな行事にも張り切れる柏原が本当に羨ましい。俺と原田なんてバス乗ってる時から鬱屈としているというのに。
「くっ…。バカな、僕の足が限界を迎えているだと！？」
バカな、どんだけ体力無いんだ！？
「おいおい、まだ十分も経ってねぇぜ？」
これにはさすがに柏原も呆れた。
「最悪バスで休憩という手段もありますが？」
委員長が原田の顔をのぞき見る。
「いや、バスの中で熱射病になるより健康的に日射病で倒れたい」
前向きなのか後ろ向きなのか分からん。が、原田なりの参加したい意思表示だろう。
「分かりました。倒れたら紗香に運ばせます」
「ちょ、なんで私！？」
「まな板の私より発展途上の紗香の方が嬉しいでしょう」

「確かに！」
柏原が大いに賛同した。そして彼の視点は奥井のある地点に集中する。
「こっち見んなエロガキ」
奥井の冷たい視線が柏原に突き刺さった！
「あ、でも、いい…」
柏原はMに目覚めた！
奥井の柏原に対する好感度だ急降下した。元からあったかどうか疑問だが。
「委員長…」
「何ですか」
「貧乳もステータスだと思うぞ」
こっちはこっちで何言ってんの!?
「…あ、ありがとうございます」
「僕は思うことを言ったまでだ」
あれ、何でいい雰囲気なの？
「じゃあ倒れたら、私がおぶっていきます。委員長として…」
「ああ、頼む」
「頼むな！　男として誇りを持て！」
情けないにも程があるぞ原田！
さて、柏原の方は…。
登山コースの外れの草むらに人間が突き刺さっていた。ちょうど犬〇家みたいになっていた。まさかこれが柏原なんてことはあるまい。マネキンか何かだろう。
「や、柳谷…」
尻が俺を呼んだ。最近の尻は言葉を、しかも言語の中でも屈指の難しさを誇る日本語を話すらしい。
「奥井はパワーファイターキャラだ！」
ガバッと起き出して柏原はそう叫んだ。奥井にちょっかいだして学び取ったことは、至極どうでもいいことだった。

そんなこんな話していると、一回目の休憩タイムが訪れた。まあ単にトイレがあるだけだが。
「すみませんが荷物番お願いします」
「へへ、任せときな」
柏原は二人に手を差し出したがあっさりスルーされ、荷物は俺と原田に渡った。
「ちょ、何でよ！？」
思春期の女子として正常な判断に基づいた行動だと思う。
「まあ思春期特有のアレのために匂いを嗅がれるのは、流石の私も嫌ですし」
「しねぇよ！　興味はあっても実行しない！」
興味あんのかよ。犯罪者予備軍の台詞だよそれ。
「絶対柏原にだけは渡さないでよ…」
「ああ。任された」
奥井に不快感を与えるのも、柏原を変態に昇華させるのも容認しない。我らがマドンナ方が花を摘みにいき終わるといよいよ山登り再開である。どうでもいいが、俺ってこんな芝居かかった話し方だっけ？
周りがキャラ強すぎるから、自分を見失いがちなのかもしれん。
「キャっ！」
委員長が小さな悲鳴を上げて原田に寄りかかった。どうやら足を取られたようだ。
「大丈夫？」
「すみません…」
「そっか。無事で何より…」
原田と委員長のやり取りを柏原はそれは大層妬ましそうに見ていたそうな。
「くそ、どうしてあいつばっか…」
どうやら柏原は原田が羨ましいらしい。いや、確実に羨ましがってる。

そしてその視線が奥井を捉えた。
「転ぶ予定は？」
「私陸上部エース」
あっさり夢は潰えたようだ。
「ゴボウは筆を間違える？」
そもそもゴボウは筆しねぇよ。つか筆するってなんだよ！
「ゴボウ…？」
奥井には伝わらず、困惑させただけだった。柏原が言いたかったのはもちろん弘法も筆の誤りである。

そんなこんなで山頂到着。疲労にメーターがあるなら、振り切る寸前である。
「ぼ、僕はベンチで休む…」
元々体力が極貧だった原田だ。無理もない。人並み（だと思いたい）に体力がある俺でも疲労困憊の感がある。
「柳谷君達は原田君の側にいて下さい。私は委員長の仕事をしてきます」
流石は我らが委員長。顔色一つ変えずに前の方へ向かっていった。
クラス毎に列べて、そこから記念撮影という流れだろう。
案の定正解でクラス毎に写真を撮っていった。
「何かこういう時って瞬きしたくなるよな」
「あぁ、何となく分かるわ」
ただのクラスメイトにしかカテゴライズされない奴と親交を深めた。
スゴくどうでもいいことで行稼ぎしたところで、お弁当タイムの開始だ。皆思い思いのところにレジャーシートを広げるなどして場所取りをし始めた。
「ち、やっぱ先に終わったクラスは有利だな」
柏原の言う通り、見渡しのいい場所はあらかた埋まっていた。
「委員長権限で何とかならねぇ？」

「流石に他のクラスはちょっと…」
え、じゃあ自分のクラスなら出来るの？　そう疑問に思ったが口にするのが怖かった。
「僕としては、景色を見ながらなんて首が痛くなるだけだし、どこでもいいよ」
最高に冷めた発言をありがとう。ロケーションも食を楽しむ重要な要素の一つだと個人的に思う。
「景色がダメならせめて涼しい場所にしようよ」
「そうですね。では紗香の意見を遵守して、あの辺りにしますか。お三方もいいですか？」
「「「あ、ああ」」」
景色に拘っていた柏原も一緒になって頷いていた。
委員長と奥井はあっという間に日陰に入ってレジャーシートを広げた。男の立つ瀬無くすくらいテキパキしてるぜ。
恙無く弁当タイム開始。
これから皆の弁当を解説していこう。
なんで？
こまけぇこたぁいいんだよ！
ではまず奥井の弁当。唐揚げ、豚でピーマン巻いた奴、ハンバーグ、ハム…。何か肉多くない？
「悪かったわね、男っぽい弁当で！」
「いや誰も何も言ってない」
「ええ？　でも何故か柳谷に失礼なこと思われた気が…」
肉多いとは思いましたが。男っぽいは言いがかりだ。
次に委員長の弁当。
ポテトサラダ、ほうれん草のおひたし、レタス、きんぴらごぼう…。
「ベジタブルだ！」
「はあ、その通りですが。それが何か？」
不思議議そうな顔をして俺の顔をじっと見る委員長。

「あ、いや。誰がどんな弁当を食おうが、食生活を送ろうが自由だようん。俺がとやかく言う必要はない」
さて次は柏原の弁当だ。むう、コメントのしようが無いほど見た目普通だ。柏原らしくもない。
「何ジロジロ見てんだよ？」
「いや、柏原の弁当なら何かあるかなと」
「はあ？　作ったの俺じゃねぇし、肉寄り弁当と野菜まみれ弁当が出た今何を期待すんだよ」
言われてみればそうだ。こいつが自分で弁当を作るわけがない。きっとお姉さんが作ってくれたんだろう。
だが事件は柏原が焼魚を食べた時起こった。
「あっっまっ！！！」
思い魚を切り吐き出した。その行方も知らずに柏原は一気にお茶を飲み干す。
「あの馬鹿姉貴何しやがんだ！　砂糖と塩間違えちゃったってか？　年齢考えやがれっ！」
「お姉さんへの詰問は生きて帰れたらすることね」
柏原が奥井を見る。すると彼女は魚の身にまみれていた。柏原が吐き出した先に奥井がいたのである。
「取り敢えず辞世の句でも読むか…、ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアっ！！！！！」
恐ろしく惨たらしいので、俺の心に留めておく。
あ、ちなみに原田の弁当はコンビニ弁当でした。

第8話・天才とバカは紙一重

中学生には大体二つのタイプの人間がいる。勉強が出来る奴と出来ない奴だ。それが顕著に現れるのが定期テストである。中学一年の時にそこそこ良い点数だった奴も、三学期にはボーダーライン（義務教育だし赤点とかはないが）を低空飛行している者も多い。理由としては、部活、やる気などの問題で一夜漬けに成らなずを得ず、結局一夜漬けではどうにもならなかったというものが多い。

そして一夜漬けの敗者が横に二名ほど項垂れていた。

一学期末テストが返却され、ご丁寧に一人一人点数表をくれたのである。これを見れば何の教科が何点だったか一目瞭然。人によっちゃありがた迷惑な代物である。

「五教科合計二百点弱…。なにこれ新手のイジメ？」

「歴としたお前の実力だよ」

「な、なんだってー！！！」

別に教師はお前のことを恨んじゃいない。

柏原は足下から崩れて椅子に寄りかかった。

因みに内訳は国語三十点、数学二十四点、英語三十八点、理科六十六点、社会四十八点である。合計二百十六点だ。

「全く、お宝本ばかりにかまけているからそうなるんだ」

「んだと？　そういう原田はどうなんだよ！」

柏原は原田の点数表をひったくった。悪いとは多少思ったが覗き見させてもらった。

内訳は国語七十点、数学五十六点、英語二十四点、社会三十点、理科四十点。合計二百二十点。僅か四点と若干とはいえ原田の方が点数が高い。

「なんだよ、対して変わらねぇじゃねぇか」

「二百十点代と二百二十点代…。この差は覆らない」

「んだと！？」
二人共無駄にプライドが高い。一触即発の雰囲気の中で、委員長と奥井が現れた。
「どうやらあまり望ましい結果ではなかったようですね」
見るからに頭の良さそうなこの二人にテストの結果を聞くのは野暮だな。柏原と原田を傷つけるだけになりそうだし。
「委員長と奥井はどんな感じ？」
バカかお前は！？　こんな見るからに頭良さそうなのに聞いたら、傷付くのはお前だぞ！
「五教科の合計は四百六十二点です」
「私は四百二十五点よ」
原田は涼しい顔をしていたが、柏原は露骨に精神的ダメージを負っていた。
「バ、バカな…。委員長はともかく奥井は脳筋（脳ミソ筋肉いぇいいぇーいの略）だと思っていたのにっ…」
というか、そんなことをべらべら吐露するもんじゃないと思う。
「そうですよね。私も不思議に思ってました」
「え゛っ！？　ちょ、嘘よね！？」
委員長にまで言われて焦る奥井。相当パワーキャラが嫌なようだ。
「はーはっはっは！　委員長にその付き人がそのような点数ではいかんぞ！」
おかしなテンションでおかしな奴がやってきた。
彼の名は天野賢児。「賢」という自分の名前にプライドがあるのか、滅茶苦茶テストの点数を取る奴である。
「私の点数は見たまえ！　なんと四百八十点だ！」
天野は誰も聞いちゃいないのにテスト成績表を自慢気に見せびらかしてきた。
ウザい。
「はぁ、すごいですねぇ。おめでとうございます」
委員長はテキトーにちらほらと拍手をした。

「はーはっはっはっ！　そうだろうそうだろう！」
天野は委員長が投げやりな態度であることにも気付かず高笑いした。
ウザい。
「ウゼぇぇぇぇぇっ！！！」
「くっ！　何をする！？」
柏原は軽く回し蹴りを天野に決めた。
「うるせぇ！　これ以上男キャラは要らねぇんだよ！　バランスを考えろ！」
何を言い出すんだお前はっ！？
「はーはっはっは！　そんなことか！　安心したまえ。私は君たちと馴れ合うつもりはない。委員長と私はライバルだからな」
「ライバル…？」
委員長は小首を傾げた。全く意に介していないご様子だ。
「すみません、何を言っているのか理解出来ないです」
「なん…だと！？」
愕然とする天野。一方的にライバル視していた感じだし、仕方ない。
「まさかライバルという言葉を知らんのか！？」
お前の方がまさかだよ！　柏原でも知ってる言葉を委員長が知らない訳がない。
「いえ、まさかあなたとそのような間柄だったとは…」
「何を言う！　天才たる私に拮抗しうる人物など伊藤綾の他に誰がいるものか！」
どうやら天野が一方的にライバル認定していたらしい。迷惑この上ない。
「はあ。ですが柳谷君も中々のものですよ」
「はあっ！？」
突然の委員長の暴言に思わず吃驚した。
「例えば…これ読めます？」

委員長はルーズリーフに流暢な字で“飛蝗”と書いた。
「飛び…。虫に皇って何だよ？」
柏原はさっぱり分からないらしく、腕を組んで唸っている。天野も口には出さないが、苦い顔をしていた。飛び回る虫とヒントは隠されているんだがな…。
「バッタだろ」
「ご名答ですね」
やっぱりか。意気揚々と答えて外したらカッコ悪いからな。
「…く。こんなもの、学校の問題には支障ない」
苦虫を噛み潰したような顔で天野は言った。
「でも学校の勉強以外にも詳しいってスゲーよなぁ～」
柏原がわざとらしくからかう口調で言う。
ちょ、あんまり天野を刺激しないでくれるか。
嫌な予感が…。
「く…、これで勝ったと思うなよ！　伊藤綾っ！　それに柳谷統夜っ！」
そう言い捨てて天野は去っていった。
って…
「俺もライバル認定された！？」
委員長は俺の肩に手を置いた。
「まあ、気を落とさないで下さい」
「元凶が何言ってやがるっ！」
くっ、俺としたことが…。
「なんてことだ…」
おお、原田も一緒に嘆いてくれるのか！
「あいつ、某ギャルゲーの捨て台詞吐いていった…」
「どうでもいいわっ！」
本当に心底どうでもいい。
つかこんなオチでいいのか？

第9話・終業式

どうも統夜だ。期末試験も終わっていよいよ夏休み到来である。何故か季節外れ感があるが、きっと気のせいだろう。
終業式での長ったらしい校長先生の話も終わり、柏原原田涙目の通知表ももらった。その際にまた天野がとやかく突っかかってきたが、まあ面倒だからなかったことにしよう。
「はーっはっはっはっ！　私にかかればオール5など朝飯前だっ！」
まだ何か聞こえるが幻聴だ。前回暴れ回った奴が連続で活躍するなど許されない。
今度こそ天野のことは置いておいて、柏原と原田と俺は、夏休みの計画について話し合うことになった。
「我が世の春が来たぞォォォォォっ！！！」
来たのは夏休みなんだが。
「引きこもってゲーム、パソコン三昧の日々を送れる長期休暇こそ、僕の時代、つまり我が世の春だぁっ！！！」
意気込んで説明しているが誰もそんなの求めてない。柏原も横で呆れていた。
「ったく分かってねぇな…。来たのは夏だぜ原田っ！　海にプール、花火大会っ！」
おお、珍しく柏原がまともなこと言ってる。
「…などに現れる水着のお姉さんに浴衣のお姉さんっ！　汗で透けたブラウスっ！　体操着っ！　露出度の高いファッションっ！」
全然まともじゃなかったっ！
むしろ超絶に邪だったっ！
「お前らな…。個性爆発させるのもいいが、少しは自重しろ」
俺が溜め息をつくと、柏原はジト目で俺を見てきた。なんだ、気

色悪ぃ…。
「まあ、無個性の柳谷じゃそういうのも仕方ないわな」
んだと…？
「常識人キャラは確かに重宝するが、パンチに欠ける場合も多い。堅物天然キャラなら、ツッコミも出来て天然ボケも出来たんだが…。まあ仕方ないな」
なるほどなぁ。別に天然と呼ばれた覚えもないし、堅物ってほど真面目でもない。確かにキャラとしては中途半端かもな。
って…。
「ほっとけ変人キャラ共ォォォォォっ！！！」
何故にキャラが弱いからって罵倒されなければならんのだっ！
「あらら、珍しいわね。柳谷が怒鳴るなんて」
「本当ですね。あの日でしょうか？」
「男子にあの日もその日もねぇよっ！」
反射的にツッコんでいた。これほどまでに自分の気が立っていたと思うと驚きである。
つか部活に委員会と忙しい筈の委員長に奥井が何の用だろうか。
「その日って何ですか？」
「さあな」
勢いで言っただけの言葉に意味は無い。
「それで何か用か？　まさかセクハラしに来たって訳じゃないだろ」
「ええまあ。明日の校外ボランティアの参加人数が足りないんです。端的に言えばゴミ拾いですね。良ければいかがですか？」
柏原と原田が揃って難色を示した。
「おいおい、こんなクソ暑い中ゴミ拾いなんかしたら熱中症でぶっ倒れるぜ？」
とうとう悪態まで柏原はつきだした。まあ確かに俺もボランティアなどごめんだが。
「仕方ありませんね…。柏原さん、こちらへ」

「あ？」
委員長は柏原を手招きして、少し離れたところまで奴を連れていった。一体何だっていうんだ？

「こ、これは…」
「ええ、プールの授業中撮った代物です」
「くぅ～。何故か男女別で授業しやがったから、この目で拝むことはないと思ってたが…」
「参加して頂ければ差し上げますが？」
「マジか！？」
「しっ！　声が大きいですよ。…で、参加して頂けますか？」
「…ここで断る奴は男じゃないぜ」
「交渉成立ですね」

あ、戻ってきた。こそこそと一体何を…。
「柳谷っ！　やっぱ地域の人間として、街が汚れているのは良くないと思わないか！」
「はぁっ！？」
意見が百八十度変わってるっ！？
委員長め、柏原にどんな袖の下を渡したんだ？
「全く簡単に買収されて、みっともない」
「なっ！？　け、決して買収された訳じゃないぜ！？」
原田の落胆に柏原は見苦しいまでに動揺した。分かりやす過ぎる。
「むぅ…。やはり柏原さんだけでは説得しきれませんか」
「そりゃ、三人の中じゃ一番地位低そうだもんねぇ」
「二人共酷くねっ！？」
確かに酷いが委員長と奥井の見解に間違いはない。
「仕方ありません。原田さん。少しよろしいですか？」
「…まあ話を聞くだけ聞こう」
原田はそう簡単に懐柔出来ないと思うが、恐ろしいさを感じるな

…。
「悪いけど、僕はそう簡単に動かないよ」
「それは重々承知です。ですから取って置きを用意しました」
「こ、これは…」
「倒産したゲーム会社の名作じゃないか。オークションでも中々手に入らない代物だぞ…」
「そのオークションで偶々目に止まりましてね」
「無欲の勝利というわけか…」
「参加して頂ければ、無償でお譲りしますが？」
「…伊藤綾、侮れないな」
「では？」
「ああ、参加を約束しよう」

あ、戻ってきた。
「柳谷っ！　やはり地域に住む者として現在のゴミの量は目に余る！　ここは委員長に協力しようじゃないか！」
「はぁっ！！？」
原田に至っては別人みたいになってるっ！？
ますますどんな袖の下なのか気になってくるな…。
「二人がやる気になってるのに、一人だけ嫌なんて言う柳谷君じゃないよねぇ？」
奥井が言うように、確かにここで断れば俺の株は底値を割る。まあ賄賂で動かされるより精神衛生上良いだろう。
俺は肩を竦めて頷いた。
「分かった、折れてやるよ」
まあ閻魔の前で情状酌量の余地を作るのも悪くないだろう。

第１０話・賄賂

嫌味なほど太陽が頑張り日射しが強く、先の方を見れば陽炎なのか歪んで見える。暑さを演出するにはこれで十分なのだが、蝉の声が拍車をかけるように暑さを醸し出していた。
シャツが身体中から噴き出す汗を吸い気持ち悪い感触を生む。
「だぁーっ！！！　やってられるかぁーっ！！！」
そう叫び柏原は匙を投げた。実際に投げたのはトングなのだが。
さて俺達が一体何をしているかと言うと、前回の話を汲んでボランティアのゴミ拾いである。死んだ時のために一つくらい善行しようと思ったのだが…。やはりこの炎天下の中ではちと辛い。
喚く柏原の側に委員長がやってきた。そして何か呟いた。
「生写真…」
「はっ！」
「あまりお粗末な仕事だと、報酬の方が…」
「わ、分かった…。その代わり…」
「ええ、御見せした写真はもちろん、プラスアルファでご用意させていただきます」
柏原はトングを拾い、キリっと良い顔をした。
「暑さがなんだ！　やってやるぜぇっ！！」
何やらよく分からないが柏原はやる気を出し、タバコの吸殻のような小さな気がつきにくいものまで徹底的にゴミを拾い始めた。
「一体何で釣ったんだ…？」
「さあ？　どうせエッチな本とかでしょ」
独りごちたつもりが奥井の耳に届いていたらしい。
「ホント、バカみたいよね。エッチな話で一喜一憂しちゃってさ」
中学生男子なんて皆そんなもんだと思うが。俺は変に老熟しているところがあるが、全く興味がない訳じゃない。
「で、柳谷はなんで手伝う気になったの？　綾が手を回したよ

うに見えなかったけど…」
まあ実際に手を回されなかった訳だしな。
「俺だけ手伝わないってのも後味悪いし。あの場じゃああ言うしかなかったよ」
「ふ～ん」
奥井は感心して頷いて、俺を見た。
「柳谷って友達思いなんだね」
思いもよらない言葉に俺は思考を止めた。別にあいつらのためにゴミ拾いをしようと思ったわけじゃない。むしろあの場で断ったら俺の株が下がるんじゃないかと、自分のために手伝ったニュアンスの方が強い。
「買いかぶり過ぎだ」
俺はその旨を奥井に伝えようとした。
「照れなくてもいいじゃん」
だがこう言われ遮られてしまった。友達思いと言われて、素直に受け止められるほど、俺は大人じゃない。
「…さっさとゴミ拾いしなきゃな」
そう言って俺は奥井から逃げた。
「柳谷、こいつを見てくれ」
「あ？」
原田が指差したのはペットボトルのゴミだ。特に注目する点なんざ無い…よな？
「蓋に応募券が貼ってある。悪いがこれがあったら僕にくれ」
確かによく見れば、何か貼ってあった。しかし泥付いてるし、これ有効なんだろうか…。
「あ、原田さん。応募券ありました」
「何っ!？　委員長直ぐ行くぞ！」
原田は委員長の元へ飛んで行った。
こんなゴミ拾いでも楽しみがあるんなら、まだ柏原よりいいか。
「お、こいつは…。エロＤＶＤのパッケージ！」

何やら柏原がこそこそしてるな。どうせエロい何かを見つけたんだろうが。
「ちっ、中身無しかよ…」
舌打ち？　あんまり内容が良くなかったのか？
「いや待て、近くに中身が落ちてるかもしれねぇ！」
あ、また何か頑張り出した。何か探してるみたいだな…。
「あった！　…ってボロボロじゃねぇかっ！　これじゃ再生もままならねぇぜ…」
喜んだり落ち込んだり忙しい奴だな。
「…ホントあんたって年中頭がピンク色ね」
「げっ！　奥井っ！？」
「中学生男子なんてそんなもんよね～」
「や、止めろ～っ！！　そんな目で俺を見るなぁっ！！」
柏原は泣きながら、いや実際には泣いてないけど、ともかく奥井の元を去っていった。遠目からでも何が起きたか簡単に想像がつくな…。

「お疲れ様でした。ゴミの方は学校のゴミ置き場までお願いします」
「「「へ～い」」」
俺と柏原と原田はゴミ袋をゴミ置き場まで運びに行くことになった。お願いしますの時に何故か自然にゴミ袋を二人から受け取ってたんだよな。人使うのに慣れすぎだろ…。
「ふっふっふ。応募券が葉書一枚分になった。フィギュアは頂きだ」
原田は何かのアニメのフィギュアの応募が出来てご満悦だった。
「あ～あ、パッケージは捨てることなかったかな…」
こっちは何の収穫もなかったようだ。
「お前ら賄賂あるんじゃなかったのか？」

「おうそうだった！」
柏原は途端に元気になった。浮き沈みの激しい奴だ。
「柳谷、お前もいるか？」
「何を貰えるか知らんが、俺はいらん」
「そうか？　なら一足先に委員長に接触しなきゃな…」
そう言うと柏原はダッシュで委員長の元へ向かった。
「原田、お前はいいのか？」
「後で個人的に貰える算段になってる」
「あっそ」
オタク趣味同士随分と仲良くなったようで。

ウキウキ気分の柏原です。授業中一度も拝めなかった女子の水着姿が拝めるとなりゃ、そりゃウキウキもするってもんだろ！
「おーい、委員長！」
「おや、もう戻ってきたんですか？」
「帰宅部のくせに無駄に体力あるわよね」
「げっ、奥井…」
こいつ居るの忘れてたぜ…。
「ではさっそく例のぶつを…」
ってどうして今出そうとしてんだ委員長!?
「わぁっ!?　待て待てここじゃ…」
例のぶつは封筒に入っているようで、奥井はそれを委員長から取った。
「これでこいつを釣ったの、綾？」
「そうなりますね」
何をしれっとしてんだ委員長ーっ！！
奥井は封筒の中身を取り出し、それを見た。その姿は嵐の前の静けさだった。

「綾、どうして私のプールの授業の写真がこんなところにあるのかしら？」
「どうしてでしょうね」
だからどうしてそんなにしれっとしてんだっ！？
「で、柏原はこれに釣られたんだ？」
「あ、あはは何のことでしょうか？　お、俺は地域のためを思って…」
「問答無用っ！」
「ひぃっ！！」
「成敗っ！！！」
「ぎゃあっ！！」
奥井の蹴りが俺の腹に決まったっ！！！
食後なら中身全てをぶちまけてる自信があるほど痛いっ！！！
俺はその場に倒れた。
「すみません、やっぱりこのような写真を流出させるわけにはいかないので」
「そうよね、綾。当然全部処分してくれるのよね？」
「…では私はこれで」
「待ちなさい綾っ！！」
薄れゆく意識の中で俺は思った。
逃げ切れ委員長っ！　と…。

第１１話・ゲーム屋巡り

どうも原田だ。今日はゴミ拾いの報酬として委員長からレア物のレトロゲームを貰い受ける日だ。柏原は貰いそこなったらしいが、僕の方は大丈夫だろう。奥井に没収されるような物じゃないし。
待ち合わせは向こうが学校を指定した。僕と委員長の家の中間地点らしい。お互い家を知らないとなると、ベストな選択だろう。
しかし僕としたことが、少々早く着きすぎたかな。指定の時間よりも三十分も早く来てしまった。だがあのゲームが手に入るとなれば、いてもたってもいられなくなるのは仕方ないことだ。
とゲームに思いを馳せていると委員長が来た。
「お待たせしました」
「いや、僕が早く着きすぎただけだ。気にすることじゃない」
「…こういう時は『今来たとこ』と返すのがセオリーでは？」
確かにギャルゲーのセオリーはそうだが、実際にそう言ってるゲームしたことないな。今度探してみよう。
「…それより例のぶつは？」
「ああはい。こちらです」
委員長はカバンからゲームソフトを取り出した。
…間違いない、僕が探していたゲームだ。
「よく落札出来たな」
「偶然ですよ。それよりハードの方は大丈夫ですか？」
「え？」
「このゲームセ〇サ〇ーンですけど」
僕はゲームソフトを裏返してみた。確かに今はハードから撤退した会社の名前が書かれていた。
「…ちなみに君は持っているのか？」
「すみません、趣味で落札しただけなんで」
つまりプレイするつもりで落札したわけじゃない。ということは

ハードの方は持っていない…。
「ってこれじゃ意味無いじゃないかぁぁぁっ！！！」
っと、僕らしくもない。思わず叫んでしまった。
「あ、あの…。大丈夫ですか？」
「ああ、大丈夫だ、問題ない」
委員長は約束通りゲームソフトを持って来てくれた。ハードの問題は僕のミスだ。
「すまない委員長。僕はこれから旅に出る」
「旅って…、セ○サ○ーンを探しにですか？」
「ああ」
行ける限り中古ゲームショップを回るか。この炎天下の中、ただでさえ体力のない僕には辛いが、言っ　てる場合じゃない。
「私も行っていいですか？」
「なに？」
思ってもない委員長の提案に僕は動揺した。てかはっきり言って中古ゲームショップ巡りは一人で気兼ねなく行きたい。
「お邪魔なのは重々承知ですが、手伝わないと後味悪いので」
「そんなこと気にする必要は…」
いや待てよ、広いゲームショップだと手分けして探せるし、僕の知らない店を知ってるかもしれないな。
「分かった。手伝ってくれ」
「いいんですか？」
「それは僕の台詞だよ。手伝ってくれるのなら助かる」
そんなわけで僕と委員長は中古ゲームショップを回ることになった。
まず一軒目。チェーン店で古過ぎるものはあまり置いていないが、万が一ということがある。
「じゃあ僕は奥から見てくる。委員長は手前から頼む」
「分かりました」

ハードだからあったら直ぐに分かると思うが、せっかくの人手だ。有効に使おう。
ソフト探すわけじゃないからな。あるとすればショーケースの中等だと思うが…。おっ、これはリト○スの初回生産板…。まさかこんなところでお目にかかれるとは…。いやだが、僕が買おうとしてるのはセ○サ○ーンだぞ？　ハードなんだぞ？　そこそこの値段になるに決まっている。ここで散財してしまったら…。だが次に来る時にはもう無いかもしれない…。
う〜ん…。どうすればいいんだっ！！
「あの…」
「はっ！？」
つい考え込んでしまった。僕の前で委員長が困った顔を…、別にしてないな。いつも通りしれっとした顔をしている。
「すまない委員長。…その様子だとぶつはなかったようだな」
「残念ながら。ソ○ーは大盤振る舞いですがね」
確かにプレイ○テーションは多いな。だが今は浮気している場合じゃない。というよりその資金がない。
誘惑に負けないためにも、早く次の店に行こう。

二軒目。ここは古本も置いてあるよくある形式の店だ。ゲーム専門でないため望みは薄いが一応な。
「さっきと同じように頼むぞ」
「分かりました」
さっそく僕はさっきと同様、奥へと進んだ。ここから先はさっきと同じというわけにはいかない。他のものには目もくれず探さないと、さすがに委員長に申し訳ない。
といってもあるならレジ周辺だろうし、僕が見つける可能性はほとんど無い。
お、これはクラ○ドのアンソロジー…。こういうのに手を出すとキリがないから、あまり手を出さないようにしてるんだが…。

ふう、面白かった。
じゃないっ！　何をやっているんだ僕はっ！
急いで探さないと…。
と振り向くとそこには委員長がいた。
「一応店内全てを見回りましたが、例のぶつはありませんでした」
「そ、そう。すまない委員長…」
「いいえ。私も見回って楽しみましたから」
「そう言ってくれると助かる」
本当にね。
「じゃあ出ますか」
「ああ。次に期待しよう」

…だが三軒四軒と次々と回っていったが、全く見つからなかった。
時計は四時を指し、小腹が空いてくる頃合いだった。というか何か栄養補給をしなければ倒れそうだ。
ファーストフード店にでも入るかな。
「委員長、あのファーストフード店に入ってもいいか？」
「え？　ええ、か、構いませんよ」
一瞬委員長が慌てたように見えたが…気のせいか。
とにかく飯だ。
僕と委員長はファーストフード店に入り、まず席を確保することにした。
「委員長、何がいい？」
「…ではハンバーガーのセットをお願いします」
「分かった」
それならケータイクーポン使えるな。僕もそうしよう。
レジに向かいハンバーガーのセットを二つ注文。もちろんクーポ

ンの提示は忘れない。品物を受けとると僕は席に戻った。
「お待たせ委員長」
「いえ…」
腹が減っては戦は出来ぬ。食べて次の旅に備えよう。しかし僕が知っててこの時間帯でも大丈夫なところあったかな。あまり遅くなると、委員長に門限があったら大変だし。
ん…？
「食べないの？」
「いえ、いただきます」
委員長はハンバーガーもフライドポテトも手付かずだった。
委員長は慌ててフライドポテトを食べ始めた。
何だか時折委員長らしくなくなるんだよな。
「あっ！」
「ん？」
「まだお金払ってませんでしたね」
ああ、そういえば。でもクーポン使ったから、結構安く済んだんだよな。
「いいよ、別に」
「え？」
「今日付き合ってもらったお礼だ。クーポン使って安く済んだし」
「そ、そう言うわけには…」
「いいから。早く食べて次の店に急ぐぞ」
でないと今日中に買えないかもしれない。
「わ、分かりました…」
納得してくれたのか委員長は食べるのを再開した。
ふう、やれやれ…。
「おっ、原田に委員長じゃねぇか。奇遇だな」
僕らを見つけ馴れ馴れしく寄ってきたのは柏原だった。何か大きな紙袋を持っているのが目を惹いた。
「お前らもやるねぇ。デートか？」

「そんなことより、その大きい紙袋はなんだ？」
「そんなことって…。まあいいや。こいつは昔懐かしのセ〇サ〇ーンだ」
ふ～ん、中々懐かしいもの持ってんだな。
って…。
「「あーっ！！」」
僕と委員長は同時に声を荒げ、中身を確認した。
「間違いありませんね」
「ああ。柏原、こいつをどこで？」
興奮して柏原の肩を掴む。
「どこって、家にあったんだよ」
「家だと？」
「ああ。もう使うこと無いし、姉貴が小遣いの足しにすればばって言うからよ。高く売れそうな店探してたんだ」
小遣いの足しにだと？　させてたまるか！
「柏原、僕に譲ってくれ！」
「はぁっ!?　冗談じゃねぇ。こいつは俺の小遣いだぞ」
く…。どうせ低俗なエロ本に化けるだけのくせに。
こいつから買おうにも、法外な値段付けられそうだし…。
「あの…」
ん？　委員長は策があるのか柏原になにやら耳打ちした。
「原田さんにお譲りすれば、前回没収されたネガをお譲りしますよ」
「なんだって！」
何を委員長が言ったか知らないが、柏原は引くくらい良い笑顔をしていた。
「原田、こいつをやるぜ！」
「おお、本当か！」
気が変わらないうちにもらっておこう。
「んじゃなっ！」

「あぁっ！」
爽やかに柏原は去って行った。
「ありがとう、委員長」
「いえ、柏原君に対するカードは多くありますので」
ああ、柏原は一生委員長には敵わないだろうな。しかしそんなことはどうでもいい。帰ってからゲーム三昧だ！
ファーストフード店を出て、帰路につくことになった。
「本当にありがとう、委員長」
「いえ、私も楽しかったですから」
委員長が楽しい時なんてあったかな？　まあいいや、早く帰ってゲームだ！

第12話・クレープ

ふっふっふ。どうも柏原です。何故こんな怪しい笑い方をしているかと言うと、委員長からマル秘ネガをもらったからだっ！
しかもフィルムでっ！
もう拝めないと思っていた女子達の水着姿、たっぷりと拝見させてもらうぜ。
しかしまさかセ〇サ〇ーンがこいつに化けるなんてな…、世の中分からんもんだな。笑いが止まらねぇぜ。
「グッヘッヘッヘ」
「うわ、笑い方キモっ！」
「うわぃっ!?」
バ、ババカなっ!?　奥井が何故ここにっ!?
取り敢えず落ち着け俺。取り乱したら前回みたく取り上げられるのがオチだ。フィルムは反射的にポケットの中に突っ込んだし、こっから出さなきゃまず問題はないはず。
「お、お前こそ何してんだよ」
「私は部活の帰りだけど…。何をそんなに焦ってんの？」
やべぇよ焦ってるって思われてるよ。何とかして話題逸らさねぇとな。
「んなことよりお前この辺に住んでんのか？」
「そうだけど…。入れないわよ？」
「別にんなつもりはねぇよ」
チクショウ、家に入れるくらいいいじゃねぇか！
とか思ってる場合じゃない。上手い具合に話題が逸れたんだ。問い詰められる前に退散するぜ。
「んじゃ俺はこれで」
「ちょっと待ちなさい」
「げっ！」

今日に限って何故に俺を呼び止める。
「結局なんでキモい笑い方してたの？」　何のためにさっきまで話題逸らすために必死だったと思ってんだコラ。
一々思い出してんじゃねぇよ！　何のためにさっきまで話題逸らすために必死だったと思ってんだコラ。
「人間誰しも急に笑いたくなる時ってあるだろ？」
「いや、特にないけど」
あれよ！　いや実際俺もそんな状況になったことねぇけど！
「まあそんなことどうでもいいじゃねぇか。部活帰り何だろ？　腹減ってんじゃねぇか？」
「ん、そうね。そういえばお腹空いてきたかも」
よっしゃ、脳みそ筋肉女のことだ。きっと食べることを考え出したら他のこと考えられねぇだろ。
「そんじゃ、さっさと帰って飯食えよ」
「あれ、おごってやるよってフラグじゃないの？」
「はぁ？」
なに厚かましいこと言ってんだこのアマ。運動してる奴に飯おごったら間違いなく破産じゃねぇか。
「こんな時間に食ったら晩飯食えなくなるぜ？」
「でもここで何か食べないと家までもたないかも」
嘘吐けこのアマ！　くそ、余計なこと言うんじゃなかったな。
中2の貴重な夏休みは始まったばかりだ。資金は可能な限り残しておきたい。海やプールに行くためにもな。そしてお姉様方をじっくり観察するためにも！　グへへ。
となると何か安くて奥井が文句言わない食べ物を探さなきゃならねぇな。
お、ちょうど良い具合にクレープ屋があるじゃねぇか。これで手を打ってもらうとするか。
「しゃーねぇ。そこのクレープ屋でいいか？」
「へぇ、ホントに奢ってくれるんだ」
「んなこと言うなら奢ってやんねぇぞ」

「ごめんごめん」
ったく調子のいい奴だな。さっさと買ってさっさと帰ってもらおう。
お、ここのクレープ屋の店員綺麗な人だな。こいつはラッキーだぜ。
「すみません、バナナチョコ二つ」
「え～。一番安いやつじゃん」
「一々文句言うな！」
「ケチ」
「うるさい。柳谷よりマシだっての」
あいつはマジで人に奢るところを見たことが無い。ま、奢ってもらうとこも見たことねぇけど。
「バナナチョコお二つでよろしいでしょうか？」
「はい。こいつの言うことは無視して下さい」
「畏まりました。…が、彼氏ならそれなりに甲斐性見せた方が良いですよ？」
「「彼氏じゃない！」」
俺らはハモッて否定した。こいつの彼氏なんて冗談じゃないぜ。逆ＤＶに苛まれる毎日が待ってるに決まってる。
つかこの店員、客に対してなんつーこと喋ってんだよ。さっき綺麗とか思って若干損したぜ。
「これは申し訳ありません。微笑ましいカップルのように見えたので…。兄弟ですか？」
「「違う！」」
こいつと血を分けるなんて、それこそ冗談じゃないぜ。つか全然似てねぇだろうが。
「あっ…」
「今度は何だっ！？」
「喋ってたら焦がしてしまいました」
「おいっ！？」

さっきから何なのこの人！？　誰か店長呼んで来て！
「お詫びと言っては難ですが、お代は結構です。どうぞ」
って焦げたのもらってもな…。
「ああ、もちろん焦げてないものをサービスするって意味ですよ」
俺の怪訝な顔を読み取ってか、店員はそんなことを言い、クレープを差し出した。
「それなら、まあ、いただきます」
一応の誠意を見せられちゃ、男として無下にするわけにはいかないからな。内心ラッキーとか思ってねぇぜ。
奥井もおずおずと受け取り頭を下げた。
「ありがとうございます」
「いえ、こちらこそ申し訳ありませんでした。懲りずにまた来て下さい」
店員はそう言って頭を下げた。けどもう行きたいと思わねぇ。

出来れば座って落ち着いて食べたかったが、良い場所が見つからず歩きながら食べることになった。
「にしても変な店員だったな…」
「うん、けど何となく綾に似てたかも」
綾って委員長のことだよな？　あいつは喋ってて焦がすようなミスしそうにねぇけど、敬語の言い回しとふてぶてしさは似てるかもな。
「姉貴とかだったりしてな」
兄弟姉妹だからって似るとは限らねぇが。俺のところみたいによ。
「ん～、綾にお姉さんいるなんて、聞いたことないなぁ」
「ふ～ん。ま、世の中にゃ似たような人間が三人いるって言うしな」
「それって、瓜二つの人が現れた時に使うんじゃないの？」
「そっか」

委員長も可愛い部類に入るとは思うが、さっきの店員は綺麗系だったからな。
…と喋っている間に俺はクレープを食べ終わってしまった。急いで食べたつもりはねぇが、ちと手が汚れちまったな。ティッシュティッシュと。
「ん？」
「げっ！」
ポケットティッシュ出すと同時にフィルムが飛び出した。それを奥井が拾い上げる。
「これ何のフィルム？」
「な、なな何だろな〜」
ヤバい、焦り過ぎて焦った反応しか出来なかった。おれ絶体絶命！？
「何その反応？　怪し過ぎて、思わず中身を確かめたくなるわね」
奥井は入れ物の蓋を外しフィルムを取り出した。それを透かして見る。何となく、奥井の表情が固まったのが分かった。
逃げるしかない。本能がそう叫ぶが、足がびくついて動かない。
「柏原…、まだ懲りてなかったようね。もう一度地獄を見せてあげる」
奥井は俺の首根っこを掴み、目が全然笑ってない笑顔を浮かべた。
「ギャアァァァァァァァっ！！！！！！！」

第13話・栞のバイト

どうも、皆のお姉さん柏原栞です。夏休みでバイトいっぱい入れるし、お金稼がなきゃね。

そんな訳でバイト行ってきます！

私がバイトしてるのは何と喫茶店。ぶらっと入って、私が何となく気に入って店長に頼み込んでバイトに採用してもらった。で、採用してもらったはいいんだけど…。

「全然人来ないですね～」

「まあ何時ものことだけどね」

私の呟きに律儀な応えたのは店長の中原雅樹さん。見た目はちょっと童顔だけど普通。でも私の大学の勉強見てくれたり、他の学生がここで勉強するのを見逃したり優しい。何でも昔喫茶店で小説書くのに憧れた友達がいたらしく、何か作業するのに寛容になったそうだ。

でもおかげで常連客しか来ないんだよね。昔馴染みの店ってわけでもないし、結構経営ヤバいんじゃないかとたまに、いやよく思う。

「そういや梨香さんはどうしたんですか？」

「買い出しに行かせてるよ」

梨香さんは店長の奥さんで、どうして結婚したのか分からないくらい美人。一回訊いてみたけど、恥ずかしがって答えてくれなかった。その時の梨香さん可愛かったな～。

「ただいま～」

「お帰りなさい、梨香さん！」

とか思ってたら本人が帰ってきた。うん、いつ見ても美人だ。

「ああ、来てたんだ。何故？」
「何故ってやだな〜。アルバイトに決まってるじゃないですか」
梨香さん美人だけど私に対して何だか意地悪。好きな子ほどいじめたくなるって奴だと私は確信している。
「全く…。お客さん来なくてただでさえ家計は火の車なのに…。はぁ〜」
「ちょっと、私見て溜め息つくの止めてくれません？」
やっぱ少し傷つく。出費ばかりが嵩むストレス社会のせいだと思い込もう。
「まあ来ちゃったもんは仕方ないか…。さっそくだけど買ってきた物、運んでくれる？」
「分かりました！」
私は梨香さんから買い物袋を受け取った。店で使う物は業者に発注しているので、梨香さんが買ってきた物は全部夫婦で使う物。というわけで荷物は全て二階の店長宅に運ぶことになる。これって喫茶店のバイトのうちに入るのかな？
「そうそう、今日トイレットペーパー安かったわ」
「本当ですか！？　帰り買ってこっかな」
弟と二人暮らしだとこういう情報は重宝する。大学の友達同士じゃ出来ないしね。
「なら今すぐ買って来るといいわ」
売り切れないうちにそうするべきかも。って…。
「ダメですよ！　今日は４時までシフト入ってるんですから」
「ちっ！」
どれだけバイト代出すの嫌何だろうこの人…。私が知る中で一番の守銭奴だよ。
「時給三百円とかになんないかしら…」
「大幅に最低賃金下回ってますけど…」
何かと人件費削減に迫ってくる。もう慣れたし、私は梨香さんのコミュニケーションの一環だと思うことにしてる。

取り敢えず下に降りるとお客さんが来ていた。
「あ、栞ちゃんバイト入ってたんだ。久しぶり〜」
この人は常連さんの酒井美緒さん。店長や梨香さんの同級生で小説家。二十代後半とは思えない可愛らしさの持ち主。ちなみに喫茶店で小説書くのに憧れた友達じゃないらしい。
「相変わらず可愛いですね」
「あら、こんなオバサンからかっても何も出ないわよ〜」
やべぇ、鼻から赤い衝動が…。私が男だったら嫁にもらってるね。間違いなくプロポーズしてるね。
「梨香さん、酒井さん持って帰っていいですか？」
「ダメよ。私だって我慢してるんだから」
鬼の守銭奴梨香さんでも、酒井さんの前では骨抜きにされてしまう。
全く罪な女だぜ…。
「お前ら客にハァハァすんの止めろ。あとそのワキワキしてる手を引っ込めとけ」
店長に指摘されて、初めて自分が変質者の手付きをしていたことに気付く。
「店長、もう少しで戻れない一歩を踏み出すところでした」
「そうか。じゃああと百歩ほど下がって仕事しろ」
店長はたまに鋭いツッコミを飛ばすことがある。どうも昔ツッコミ役だったみたい。
「はいエスプレッソお待ち」
「ありがとう〜。喫茶店来たからにはコーヒー飲まなきゃね〜」
「序でに昼飯も食べてくれ。ランチタイムなのにご覧の有り様だ」
ファミレスじゃないから、お客様で溢れ返ってる状況はノーサンキュー。だけど、来るお客様の大半が　コーヒー一杯だけって状況もノーサンキューだよね。単価が安すぎるし。
「私みたいな売れない小説家じゃ、とても外食なんて出来ないよ。もうちょっと安かったらいいんだけど」

何となく喫茶店のメニューってファミレスとかと比べると若干高い気がしないでもない。一応完全な主観だとフォローしとく。誰に対してか分かんないけど。
「印税入ったら大盤振る舞いするよ」
「期待して待ってるよ」
そう言って店長は伝票を酒井さんの側に置いた。
酒井さんがベストセラー書くのと、この店が潰れるのどっちが先だろう…なんて野暮なこと考えちゃいけない。
「美緒ちゃん…、絶対売れてね」
梨香さんは酒井さんの手をぎゅっと握った。
「梨香ちゃん…、目がマジ過ぎて頷けないよ」
数少ないお得意様の前に、親友同士のはずなんだけどなぁ。
「でも、私の給料にも関係するし、売れて下さいね！」
「その声援じゃ、素直に頑張れないなぁ…」
ですよね。

…とまあこんな感じに、私のバイト先はゆるゆるとしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6419t/

その頃誰もがバカだった

2011年12月18日00時52分発行